

[研究論文]

Jane Eyre: An Autobiography の構成

山下雅史

序章

『ジェイン・エア：自叙伝』（*Jane Eyre: An Autobiography*）はイングランドの女性作家シャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë）によって書かれた小説であり、1847年10月16日にスミス・エルダー社（Smith, Elder & Co.）から出版された。副題で示されているとおり、『ジェイン・エア』は自叙伝である。初版においては、彼女はカラー・ベル（Currer Bell）という偽名を使って、ジェイン・ロチェスター（Jane Rochester）という別の人物が書いた自叙伝を自分が編集したという体裁を取っている。そのため私たちは、『ジェイン・エア』を読む時に、ジェイン・ロチェスターという架空の「作者」の存在を想定することができる。「作者」ジェインは、30歳の時に自分の人生を振り返って書いているが、彼女が30年間に経験したすべてのことを取り上げているわけではない。奥村真紀は「語り手ジェインは、自分が語りたくないこと、あるいは語れることだけを語っていることを十分に意識している」（110）と指摘している。

『ジェイン・エア』は、物語の舞台となっている家に対応した5つの部分に分けることができる。この分け方に基づけば、『ジェイン・エア』のあらすじは以下になる。

最初の舞台は、ゲイツヘッド・ホール（Gateshead Hall）であり、第1章から第4章までの部分に対応している。この時点においては、ジェインは10歳であり、彼女の家名はエアである。ジェイン・エアは孤児であり、親戚のミセス・リード（Mrs Reed）が彼女を養育している。ジェインは養育者のミセス・リードから厄介者扱いされており、自分は不幸であると思っている。ミセス・リードは薬剤師のミスタ・ロイド（Mr Lloyd）の提案を受けて、ジェインをローウッド養育院（Lowood Orphan Asylum）に入れることを決める。ミセス・リードが養育院の管理者であるブロックルハースト（Brocklehurst）に、ジェインには人をだます癖があると告げたことから、ジェインはそれを否定するためにミセス・リードに対して初めて反抗する。

次に続く第5章から第10章までの部分においては、「作者」ジェインは、ローウッド養育院において流行病が蔓延した出来事に焦点を当てて書いている。養育院の劣悪な環境によって多数の生徒が流行病で犠牲になった結果、ブロックルハーストは養育院の管理者としての立場を失う。この出来事をきっかけに養育院は改善されて再生される。このローウッド養育院において、ジェインは6年間を生徒として過ごし、そして優秀な成績をおさめたことから教師の職を与えられて2年間働く。しかし彼女は、自分の心の支えとなっていたミス・テンブル（Miss Temple）が養育院を去ったことから、自分も養育院を去ろうと考

える。ジェインはソーンフィールド・ホール (Thornfield Hall) における家庭教師 (governess) の職を得る。

ソーンフィールド・ホールは第 11 章から第 27 章までの舞台である。ジェインはアデル・ヴァランス (Adèle Varens) という女の子の家庭教師として雇われる。アデルがフランス語を話すことから、フランス語を話せる家庭教師が必要とされていた。ジェインはこのソーンフィールド・ホールでエドワード・ロチェスター (Edward Rochester) というこの家の主人と出会い、彼と恋に落ちる。ジェインは家庭教師として雇われた身であるにすぎないにも関わらず、エドワードは彼女を家人のように扱い、彼女は裕福で幸せな生活を送る。

ミセス・リードは、自分の死が迫ってきていることを悟り、ジェインをソーンフィールド・ホールからゲイツヘッド・ホールに呼び寄せる。ミセス・リードは、ジェインの叔父であるジョン・エア (John Eyre) の手紙をジェインに手渡し、ジョン・エアにジェインは流行病で死んだと嘘をついたと告白する。ジェインは彼の手紙を読み、彼が死後にジェインへ遺産を渡そうと考えていることを知る。

ジェインはソーンフィールド・ホールに戻り、エドワードと結婚の約束をする。彼女はエドワードとの結婚について自分の叔父であるジョン・エアに手紙を送って報告する。そして、エドワードとの結婚式を迎えるが、彼にはすでにパーサ (Bertha) という妻がおり、彼が重婚を計画していたことが式の最中に判明する。ジェインは彼を愛しつつも、ソーンフィールド・ホールを去る。

ジェインは放浪の果てに飢えた状態でムーア・ハウス (Moor House) にたどり着き、セント＝ジョン (St John) と彼の妹たちによって助けられる。ムーア・ハウスは、第 28 章から第 35 章までの部分に対応している。ジェインはジェイン・エリオット (Jane Elliott) という偽名を用いながらムーア・ハウスで過ごす。セント＝ジョンはジェインに、彼自身が作った学校の教師という職と住まいを用意する。ジェインが教師として過ごす間に、セント＝ジョンは彼女の本当の氏名を突き止め、彼女が自分の従妹であると知る。このときには、ジェインの叔父であるジョン・エアはなくなっており、彼女はジョン・エアの遺産の相続者として捜されていた。セント＝ジョンはジェインに対して、自分が彼女の従兄であることと、ジョン・エアの遺産を彼女が相続できることを伝える。ジェインは自分の従兄妹に出会えたことに喜び、ジョン・エアの遺産を彼らと分け合う。

セント＝ジョンはインドへ宣教に行くことを計画しており、ジェインに自分の妻として宣教の旅に同行するように求める。しかし彼女は、それを拒否し、エドワードをさがしに出る。

最後の舞台はファーンディーン・マナー (Ferndean Manor) である。ジェインは、パーサがすでに亡くなっていることと、エドワードがファーンディーン・マナーに引越したことを知る。ジェインはそこで彼と再会して、彼と合法的に結婚する。この結婚によって、彼女の氏名はジェイン・ロチェスターとなる。

さて、このように、『ジェイン・エア』の物語はジェインとエドワードの結婚で終わるこ

とから、一般に『ジェイン・エア』は恋愛小説であると言われている。「作者」ジェインは、エドワードとの結婚の経緯を説明するために自叙伝を書いたように見える。

しかし、そうであるとするならば、『ジェイン・エア』には不要な文章が存在している。『ジェイン・エア』の最後には、セント＝ジョンを賛美する言葉が書き連ねられており、彼の言葉で締めくくられているのである。また、ゲイツヘッド・ホールの部分とローウッド養育院の部分は、ジェインの幼少期を説明しており、結婚の経緯と関係がない。ジェインはソーンフィールド・ホールにおいてエドワードと知り合ったからである。初めてエドワードについて言及されるのは、第11章である。

自叙伝を書いた時期と自叙伝の題名とには、不自然さがある。「作者」ジェインは30歳であり、結婚してから10年後に自叙伝を書いている。ジェインは結婚によってジェイン・ロチェスターとなった。「作者」ジェインは10年間をジェイン・ロチェスターという氏名で生きてきたことは明らかである。しかしながら、自叙伝の題名は『ジェイン・エア』となっている。「作者」ジェインが自叙伝を書いた目的がエドワード・ロチェスターとの結婚の経緯を説明するためであるならば、自叙伝の題名は『ジェイン・エア』よりも「ジェイン・ロチェスター」の方が自然ではないだろうか。加えて、ジェインが結婚する相手を最後まで読者に明かさないようにするために、「作者」ジェインは、自分の自叙伝の題名を「ジェイン」とすることもできた。

これらのことから、「作者」ジェインが自叙伝を書いた目的は、エドワードとの結婚の経緯を説明するためではないように思われるのである。この作品における「作者」ジェインの目的をエドワードとの結婚の経緯を説明することであるとすれば、この作品の構成や題名は、その目的に適していない。

この作品の題名には「エア」(Eyre)が使われている。「作者」ジェインは、彼女自身以外にも「エア」という名を持つ人々について第3章から言及している。ジェインがこの作品において出会う人々の中で「エア」という名を持つのは、セント＝ジョン・エア・リヴァーズ(St John Eyre Rivers)だけである。

本論においては、「作者」のジェイン・ロチェスターが30歳の時に自叙伝を書いたきっかけと目的、そして彼女が過ごした5つの家が物語の舞台として選ばれている理由について、ジェインとセント＝ジョンとのかかわりから考察していきたい。

第一章 自叙伝の題名とジェインの家名

『ジェイン・エア』が恋愛小説であるとするならば、「作者」ジェインが自叙伝を書いた目的は、自分がエドワード・ロチェスターと結婚した経緯を説明することであると考えられる。しかしながら自叙伝の題名には、ジェインが結婚した相手の家名「ロチェスター」ではなく、「エア」という家名が使われている。ジェインが結婚した相手を物語の最後まで

伏せておくという意図があったとしても、「作者」ジェインは、自叙伝の題名を『ジェイン・エア』ではなく『ジェイン』とすることができた。

『ジェイン・エア』という題名からは、まるで「作者」ジェインに「エア」と名乗りたいこだわりがあったかのように見える。他方で、作品の記述からは、ジェイン自身に「エア」と名乗ることになんらかのこだわりがあったようには見えない。彼女は、結婚の承諾とともに、自分の氏名がジェイン・ロチェスターになることを受け入れている。

「作者」ジェインには、自叙伝の題名に「エア」を用いなければならない何らかの事情があったのではないだろうか。本論の第一章においては、ジェインの家名について考察していく。

一節 地水火風の四大元素

「作者」ジェインには、人を気質の点で地水火風の四大元素に分類する考えがあったと思われる。第33章におけるジェインの言葉には、ジェイン自身は「火」であり、他方でセント＝ジョンは「水」である、とみなして発せられているものがある。「水」は四大元素の「水」に分類されるものである。

‘But I apprised you that I was a hard man,’ said he, ‘difficult to persuade.’

‘And I am a hard woman – impossible to put off.’

‘And then,’ he pursued, ‘I am cold: no fervour infects me.’

‘Whereas I am hot, and fire dissolves ice. . . .’⁽¹⁾

(「しかしわたしは前に申したように強情な男ですよ」と彼は言った。「説得は容易ではない」)

「わたくしも強情な女です——ぜったいあきらめません」

「それに」と彼は言葉をついだ。「わたしは冷たい。どんなに熱いものにも平気です」

「ところがわたくしは熱い、火は氷を溶かします。…」)

物語を通して、ジェインは自分の感情に従う人物であり、他方でセント＝ジョンは感情の高まりを抑え理性に従う人物である。感情に従う気質は「火」を連想させる。水は火を消すことから、感情の高まりを抑え理性に従う気質は「水」であると考えられる。したがって、ジェインの気質が「火」であるとすれば、セント＝ジョンの気質は「水」であると見えよう。

『ジェイン・エア』の物語においては、四大元素のいずれかを読者に想像させる家名を持つ人物がいる。例えば、セント＝ジョンの家名「リヴァーズ」(Rivers)は、彼が「水」の気質を持っているということを容易に想像させるものである。さらに、ジェインの家名「エア」(Eyre)の発音は、air(空気)という単語を思い浮かばせる。四大元素の考えにお

いて、空気は「風」に分類される。「作者」ジェイン自身が、四大元素を想像させる家名を持っていたのである。人を四大元素に分類するという考えが「作者」ジェインにあったならば、彼女は、登場人物の家名と四大元素とを結びつけて考えたであろう。

二節 結婚後のジェインの家名「ロチェスター」

主人公のジェインは、物語の終わりでエドワード・ロチェスターと結婚する。白井義昭は「ロチェスター」という家名について次のように述べている。

彼の名前のロチェスター (Rochester) だが、これがローマ軍の「とりで」を意味し、したがって「岩」を暗示する、古英語の Hrofesceaster から出ていることを考えると、この名前の持ち主は力強く頑強な男ということになるだろう。確かにジェインはロチェスター氏をそのように見ているようである。(122)

ロチェスターという家名が「岩」を暗示することから、ロチェスター家の人々は地水火風の四大元素の「地」の気質を持っていると考えられる。「とりで」や「岩」は、自らが動くものではなく、また他者が容易に動かすことのできないものである。

ジェインの家名は、結婚によってエアからロチェスターに変わる。これは、ジェインが「空気」と「火」の気質を失い、代わりに「地」の気質を得るということである。ジェイン・ロチェスターは、結婚してから10年後に『ジェイン・エア』を書いたが、その10年間は引越越しをしておらず、夫とともにフォーンディーン・マナーに住み続けている。

主要な登場人物たちの家名の中で「地」を想像させるものは、ロチェスターとメイソン (Mason) だけである。Mason は石を取り扱う職業の名であり、「地」に関連がある。ロチェスターという名が初めて登場するのは第11章であり、第1章から第10章までの部分で登場することはない。他方で、メイソンという名は第19章において初めて登場し、第1章から第18章までの部分には登場していない。

ロチェスターとメイソンという「地」を想像させる家名には、物語の第1章から第10章までは登場しないという共通点がある。「作者」ジェインの自叙伝は38の章から構成されており、第1章から第10章までの部分は全体のおよそ4分の1に相当する。したがって、物語全体のおよそ4分の1に相当する部分は、「地」を想像させる家名とはまったく関係がない。この部分を自叙伝に加えるのならば、自叙伝の題名には「地」を想像させる家名は適さないとと思われる。ゆえに、「作者」ジェインの自叙伝の題名には「ロチェスター」という家名が使われなかったのであろう。

三節 結婚前のジェインの家名「エア」

第1章から第10章までの部分においては、作者「ジェイン」は、自分が18歳になるころまでの人生について書いている一方で、「作者」ジェインが結婚した相手であるロチェスターに関係することについては書いていない。この部分は、「作者」ジェインの結婚の経緯の説明には不要である。したがって第1章から第10章までの部分は、「作者」ジェインの結婚の経緯を説明するという目的のために書かれたものではない、と考えられる。

「作者」ジェインは、自分がローウッド養育院で過ごした8年間についてはほとんど言及していない。その8年間については、彼女は、ローウッド養育院がチフス (typhus) の蔓延後に再生されたことと、自分が養育院で教師の職を得たことを第10章において簡潔に述べているだけである。その8年間においては少なくとも、彼女は、養育院の教師という職を与えられるという出来事を経験している。この出来事を説明することは、彼女の経歴を説明するという目的を達成するためには欠かせないことである。しかしながら彼女は、この出来事について詳しく説明するということをしていない。彼女が自叙伝を書いた目的が、彼女自身の経歴を説明することであるとすれば、これは不自然な点である。

また、「作者」ジェインは、ジェイン・ロチェスターとしての10年間の人生について書くことを意図的に避けたように思われる。なぜならば、「作者」ジェインが直近の10年間のことを忘れていたとは考え難いからである。彼女は、結婚後の10年間のことを詳しくは書いていないものの、エドワードの視力が回復していったことと、彼との間に子供を授かったこととを最後の章において読者に伝えている。

「作者」ジェインの自叙伝は、その題名『ジェイン・エア：自叙伝』が示すとおり、彼女がジェイン・ロチェスターではなくジェイン・エアという人物の物語を書いた、ということを読者に示している。彼女の自叙伝で語られている物語における最後の出来事は、ジェインの結婚の報告である。すなわち、ジェイン・エアがジェイン・ロチェスターとなるところで物語は終わるのである。最後の章においては、「作者」ジェインは、物語に登場した人々が自分の結婚後にたどった運命について触れてはいるが、詳しくは書いていない。よって、『ジェイン・エア：自叙伝』がジェイン・エアという人物の物語であることは、明らかである。

以上のことから、「作者」ジェインには、自分がジェイン・エアとして生きた時期に限定して自らの自叙伝を書く何かしらの理由があった、と考えられる。このことは、彼女が「エア」という家名を自叙伝の題名に加えたことに関係しているであろう。

四節 物語の内容を示す「エア」

Eyre (エア) の語源は、「旅する」(to journey) を意味するラテン語の iterare である。(“eyre, n.”) 「作者」ジェインの自叙伝において、エア家の人々は旅人のように各地を転々としてい

る。ジェインの叔父であるジョン・エアは、商人として各地を渡り歩いて財産を築き上げており、ジェインの従兄であるセント＝ジョン・エア・リヴァーズは、インドへ宣教の旅に出る。ジェイン・エアも物語の中で旅をしており、ロチェスターと結婚するまで5つの家移っていく。

また、Eyreの発音から連想されるerrの語源は、「道に迷う」や「放浪する」を意味するラテン語のerrareである。 (“err, v.”) ジェインは、ソーンフィールド・ホールから出てムーア・ハウスにたどり着くまでの間、放浪している。青山誠子は「同じ語源を持つ‘errant’には冒険的遍歴の意味がある」(125)と述べている。

これらのことから、主人公のジェイン・エアには、エアという家名を持つために、居場所を転々とする旅人の気質があると言えよう。「作者」ジェインが自叙伝の題名に家名「エア」を加えたのは、語源を踏まえて、ジェイン・エアが居場所を転々としたことを示すということを考えたからである、と思われる。

さらにEmily Eellsは、ジェインの家名はフランス語の文字Rの同音異形異義語であり、この文字Rが、リード家のジェインの拒絶からロチェスター夫人としての最終的な地位まで、ジェインが家族を探し求めることを示している、と指摘している。(par.2)「作者」ジェインはローウッド養育院でフランス語を学んでおり、フランス語の文字と発音を理解している。したがって、自叙伝の題名にジェインの家名「エア」(Eyre)があるのは、自叙伝の題名で物語の構成をほのめかすということを「作者」ジェインが意図したからである、と考えられる。

よって、Eyreの語源とフランス語における発音の点から、「作者」ジェインは、ジェイン・エアが家族を探し求めて居所を転々とするという物語の内容を家名「エア」で示すことを意図して、自叙伝の題名を『ジェイン・エア』としたのであろう。

五節 ジェインの「空気」と「火」の気質

「作者」ジェインは、フランス語を話すことができる。彼女は、この能力が求められていた、アデルの家庭教師として雇われた。アデルがフランス語を話すことから、アデルの家庭教師はフランス語を話さなければならなかった。第11章において「作者」ジェインは、自分の家名Eyre(エア)をフランス語に音訳した綴りをアデルの言葉の中で示している。アデルはジェインの氏名を聞いて、すぐさまAireとフランス語に音訳している。

Aireの綴りからはairを見つけることができる。フランス語のairという単語は、英語のairに相当する単語であり、「空気」を意味する。 (“air¹”) またフランス語においては、Aireは発音の点でairと同じである。 (“aire”) これらのことから「作者」ジェインは、アデルが自分の家名Eyreを音訳した言葉を書く際に、AireとAirの2つの綴りを思い浮かべたであろう。したがって「作者」ジェインが、自叙伝を書いたとき、自分の家名Eyreから「空気」を連想したことがあった、と考えられる。

中岡洋は「エア (Eyre) という名字は『空気』(air) のイメージを有している」(71) と指摘している。空気には、他のものに支配されずに自由奔放に移動するイメージがある。空気も一つの場所にとどまり続けないものであり、風として常に各地を旅する。このことから、エアという家名は、ジェインの「空気」のような性質を暗示している。したがって、ジェインは行動的であり、他者の支配を受け入れようとしない性格をしていると思われる。ゲイツヘッドにおいては、ジェインはミセス・リードやジョン・リード (John Reed) の支配に抵抗している。

ジェインは情熱的な人物であり、自分の自由を奪う人物に対して激しく抵抗する。このことを考慮すると、ジェインは、地水火風の四大元素の「火」の気質をも持っていると思われる。中岡洋は、彼女の情熱的な気質と家名「エア」について次のように述べている。

さらにこの家族名はジェインに影響を与えて彼女の激しい情熱を生み出している。空気は本来自由奔放、気ままに循環するものであるが、圧縮されたり濃縮されたりすると熱や炎となる性質がある。ジェイン・エアの情熱の本質は、まさに圧縮されてきた炎といえる。いつも遠くの世界や外の世界に憧れているジェインは、彼女の希望がかなっているうちは、おとなしく理性的な人物であるが、彼女の進路を塞がれると狂人のように抵抗するのである。(73-75)

ジェインの持つ家名 Eyre (エア) は、歴史的な綴りの形からも「火」の気質を見つけることができる。Eyre (エア) は、ラテン語の *iterare* を語源とし、古フランス語の *eire* を通して英語に取り入れられた単語であり、英語においても *eire* と綴られていた時期があった。 (“*eyre, n.*”) この *eire* という *eyre* の古い形からは、*ire* (怒り) という英単語を見つけることができる。この *ire* (怒り) は、*female* (女性) の *f* が加えられれば、*fire* (火) になる。したがって、Eyre を家名として持つ女性は、「怒り」を覚えると、「火」の気質が強く表れる人物である、と言えるのではないだろうか。例えば、ジェインは女性である。第4章において彼女は、ミセス・リードに怒りを覚え、感情を激しく表に出しながら、ミセス・リードに反抗している。

ジェインは、自由奔放な「空気」の気質を持っており、自分の自由を奪われたときに「怒り」を覚えることによって「火」の気質を得て、激しく抵抗する、と考えられる。したがって地水火風の四大元素を考慮すれば、ジェイン・エアは自由に旅をする「空気」の気質を持ち、他者から抑圧された時に激しく抵抗する「火」の気質をも持っている人物である、と言えよう。

六節 ジェインとセント=ジョンが共有する「エア」

「作者」ジェインの自叙伝において「エア」を氏名に持っている人物は、ジェインだけ

ではない。セント＝ジョンも自分の氏名に「エア」を持っている人物である。第33章においてジェインは、偽名を使って辺鄙な村で過ごしていたのにもかかわらず、自分がジェイン・エアであると特定された経緯についてセント＝ジョンに話してもらえるように、彼の説得を試みる。セント＝ジョンは、ジェインに対して、「エア」の名を持っているという共通点を示すことによって、自分が彼女の従兄であると明かす。

‘Well, then,’ he said, ‘I yield; if not to your earnestness, to your perseverance: as stone is worn by continual dropping. Besides, you must know some day – as well now as later. Your name is Jane Eyre?’

‘Of course: that was all settled before.’

‘You are not, perhaps, aware that I am your namesake? – that I was christened St John Eyre Rivers?’ (443; ch. XXXIII)

（「そういうことなら」と彼は言った。「折れましょう。あなたの熱意にはなく、根気よさには負けました。たえまなく落ちる雨だれは石にも穴をうがつと言います。それにあなたも、遅かれ早かれ知らねばなりません。あなたの名前はジェイン・エアですね？」

「そうですとも。それはもうわかったことではありませんか」

「おそらくあなたは、わたしがあなたと同姓なのに気づいていませんね？ わたしの洗礼名は、セント＝ジョン・エア・リヴァーズなのですよ」

登場人物の家名が気質に関係しているとすれば、セント＝ジョンは、家名「エア」を表される気質を持っている。すなわち、セント＝ジョンは、ジェインと同じように「空気」と「火」の気質を持っている、と考えられる。セント＝ジョンはインドへ宣教の旅に出ることを夢見ており、旅をする「空気」の気質を持っている。また、彼が持つ「火」の気質はジェインとは異なるものであるが、彼も確かに「火」の気質を持っている。このことは、次に引用するジェインとセント＝ジョンの会話によって示されている。セント＝ジョンはジェインの目を見て、ジェインの気質を語る。

‘You will not stay at Morton long: no, no!’

‘Why? What is your reason for saying so?’

‘I read it in your eye; it is not of that description which promises the maintenance of an even tenor in life.’

‘I am not ambitious.’

He started at the word ‘ambitious.’ He repeated, ‘No. What made you think of ambition? Who is ambitious? I know I am: but how did you find it out?’

‘I was speaking of myself.’

‘Well, if you are not ambitious, you are—’ He paused.

‘What?’

‘I was going to say, impassioned: but perhaps you would have misunderstood the word, and been displeased. . . .’ (409; ch. XXX)

（「あなたはモートンにそう長くはいないな。そう、そうとも」

「なぜですか？ どうしてそんなことをおっしゃるのですか？」

「あなたの目にそう書いてあります。穏やかな人生を続けていこうとは言っていない」

「わたくしは野心家ではありません」

彼は「野心家、という言葉におどろいたようだった。彼は繰り返した。「そうとも。なんで野心家などという言葉をおいついたのですか？ だれが野心家なのですか？ たしかにわたしは野心家です。どうしてそれがあなたにわかったのだろうか？」

「わたくしは自分のことを申したのです」

「そう、野心家でないなら、あなたは——」彼は口をつぐんだ。

「为什么呢？」

「情熱家だと言うつもりだった。しかしあなたはこの言葉を誤解して、気分を害するでしょうね。…」

ジェインは情熱家であり、セント＝ジョンは野心家である。野心家の気質は、情熱家の気質ほど激しい「火」を思い浮かばせないが、「火」を連想させるものである。したがって、セント＝ジョンも「火」の気質を持っていると言えよう。

氏名に「エア」を持つという共通点がありながら、このような違いがジェインとセント＝ジョンとの間に生じるのは、セント＝ジョンが家名「リヴァーズ」を持っているからであろう。家名「リヴァーズ」(Rivers) は、彼が「水」の気質を持っているということを示している。セント＝ジョンの氏名に関しては、この「水」の気質が、家名「エア」から生じる「火」の気質を抑え込んでいる、と考えられる。ゆえに、セント＝ジョンの持つ「火」の気質は、ジェインのような情熱家という形ではなく、野心家という形であらわれているのである。

さらには、家名「エア」にも、「水」の気質があると考えられる点がある。すでに述べたとおり、アデルは、ジェインの氏名をフランス語で Aire と音訳している。Aire は、『ジェイン・エア』の舞台のモデルであるとされている West Yorkshire を流れる川の名前である。このことから、家名「エア」は「水」の気質をも連想させる。この「エア」から生じる「水」の気質は、ジェインとセント＝ジョンに冷静さを与えている、と思われる。ジェインは情熱家であるが、冷静さをも持っている人物である。

以上のことから、セント＝ジョンは、「火」の気質のあらわれ方に違いはあるものの、ジェインと同じ気質を持っている人物である、と言えよう。したがって、地水火風の四大元素で人を分類する考えを踏まえれば、「作者」ジェインが家名「エア」を自叙伝の題名に用

いていることは、ジェインがセント＝ジョンと同じ気質で分類される人物であることを示している。「作者」ジェインが自叙伝の題名を『ジェイン・エア』としたことには、セント＝ジョンが関わっているのではないだろうか。

第二章 「作者」ジェインの意図とセント＝ジョン

本論の第一章四節においては、自叙伝の題名が『ジェイン・エア』であることには、ジェインが家族を探し求めて居所を転々とするという物語の内容を家名「エア」で示すという「作者」ジェインの意図があると明らかにした。また、本論の第一章六節においては、『ジェイン・エア』が「作者」ジェインの自叙伝の題名になった事情には、セント＝ジョンが関わっていることを導き出した。本論の第二章においては、ジェインとセント＝ジョンとのかかわりから、「作者」ジェインが自叙伝を書いたきっかけと目的を考察していく。

一節 「作者」ジェインが自叙伝を書いたきっかけと目的

自叙伝の物語における最初と最後の部分は、セント＝ジョンと関係があるものになっている。本という媒体においては、読者は最初に題名を目にすることから、題名は物語の最初の部分に位置すると考えられる。「作者」ジェインの自叙伝の題名は『ジェイン・エア』である。この題名における家名「エア」は、共通の名を持つ人物であるという点において、ジェイン・エアとセント＝ジョン・エア・リヴァーズとのかかわりに読者の意識を向けさせる。他方で、自叙伝の最後の部分においては、「作者」ジェインは、自分や夫についての言葉ではなく、セント＝ジョンを賛美する言葉を書き連ねている。彼女の自叙伝は、セント＝ジョンの言葉によって締めくくられているのである。

セント＝ジョンについて書かれた最後の部分について都留信夫は、彼と結婚して彼の生き方で生きていくことを拒否した自分の選択が正しく、彼の信じているカルヴィニズムが誤りであることを示すために、彼には生きていてほしくないと思う彼女の気持ちが出ている、と指摘している。(215)しかし、彼女の言動はそれと一致していない。ジェインはセント＝ジョンに結婚の報告をしており、結婚後も彼と手紙のやり取りを何度もしている。そして、彼の死が近づいていることを告げる手紙を受け取った時、彼女は涙を流しているのである。セント＝ジョンとジェインの関係を考慮すれば、むしろ「作者」ジェインは、セント＝ジョン・エア・リヴァーズがもうすぐ死んでしまうからこそ『ジェイン・エア』と題した自叙伝を書いたのではないだろうか。

セント＝ジョンとジェインとの間には強い結びつきが見られる。まず、ジェイン (Jane) はジョン (John) の女性形であり、二人とも洗礼者ヨハネに由来する名前を持っている。さらに、二人ともエアという家名を持っているという共通点もある。また、二人は従兄妹で

あるため、二人には血のつながりがある。このように氏名と血縁の両方の点で結び付いている登場人物は、ジェインとセント＝ジョンの二人だけである。したがって、二人には特別な強い結びつきがあると思われる。さらに、セント＝ジョンは、彼女が飢えて倒れていたところを救った人物でもあり、彼女に結婚を申し込んだ男性でもある。これらのことから、ジェインがセント＝ジョンを自分にとって特別な人物であると考えていても、それはまったく不思議なことではない。

セント＝ジョンは、自分の死が迫っていることを手紙でジェインに伝えた。「作者」ジェインは、自分にとって特別な人がもうすぐ死んでしまう運命にあると知ったから、彼について自分の知るすべてのことを書こうとした、と考えられる。したがって、『ジェイン・エア』はセント＝ジョンのために書かれた作品であり、セント＝ジョンを賛美する言葉が物語の最後の部分に書かれている。「作者」ジェインが自叙伝を書いたきっかけは、彼女がセント＝ジョンからの最後の手紙を受け取ったことであろう。

二節 「作者」ジェインの人生とセント＝ジョンとの接点

「作者」ジェインが自分の人生においてセント＝ジョンと関わり合いのあった時期は、彼女がムーア・ハウスとモートン (Morton) にいた時だけである。しかしながら、その時のことだけを書くこととセント＝ジョンに関係のあることで説明できないことが複数ある。例えば、ジェインとセント＝ジョンは、彼らの叔父のジョン・エアの遺産を分割して相続するが、その遺産について説明するには、ゲイツヘッド・ホールのミス・リードとジェインとのかかわりについて書く必要がある。セント＝ジョンはジェインに学校の教師という職を与えるが、その経緯を説明するには、彼女がローウッド養育院において教師をしていたことも書かなければならない。そして、彼女がセント＝ジョンと決別した理由を説明するためには、セント＝ジョンと出会う前に、彼女がソーンフィールド・ホールにおいて夫のロチェスターと出会って彼を愛するようになったことを書くことになる。

したがって「作者」ジェインは、セント＝ジョンについて書くために、ゲイツヘッド・ホール、ローウッド養育院、ソーンフィールド・ホールの3つの家に住んでいた時のことも書かざるを得なかった。それは彼女にとって、ゲイツヘッド・ホールに住んでいた幼少期から自分の人生を振り返って書くことと違いはない。ゆえに「作者」ジェインは、自叙伝を書いたのである。

「作者」ジェインがエドワードと結婚したころ、セント＝ジョンはインドへ宣教の旅に出た。それから10年間、セント＝ジョンはインドからイングランドへ戻ることはなく、ジェインとは手紙のやり取りをするだけで会うことはしていなかった。このような事情から、「作者」ジェインは、自分がエドワードと結婚してからの10年間におけるセント＝ジョンに関することは詳しくはない。それゆえに彼女は、自分がジェイン・ロチェスターとして生きてきた直近の10年間のことについては書くことを避けたのである。

以上のことから、「作者」ジェインが自叙伝を書いた目的とは、セント＝ジョンについて自分が知っているすべてのことを書くことである、と考えられる。

第三章 ジェインとエドワード

本論の第二章において、「作者」ジェインが自叙伝を書いた目的は、セント＝ジョンについて彼女が知るすべてのことを書くということであるとした。この仮定が正しければ、その目的を果たすために必要なことが、彼女が過ごしたそれぞれの家に対応する部分において書かれている、と考えられる。本論の第三章においては、ソーンフィールド・ホールを舞台とする第 11 章から第 27 章までの部分と、ファーンディーン・マナーを舞台とする第 36 章から第 38 章までの部分について確かめていく。

一節 ソーンフィールド・ホール

一項 セント＝ジョンとの出会い

「作者」ジェインがセント＝ジョンについて自分の知るすべてのことを書くならば、彼女は彼との出会いについて書かざるを得ない。ジェインは、重婚を計画していたエドワード・ロチェスターの手が及ばない場所へ逃げるために馬車に乗る。彼女は自分の所持金を馬車の運賃で使い果たし、新たな住まいと職を求めて二日間放浪することとなる。放浪の間、彼女は 2 回だけしか食べ物をお口にすることができず、飢えに苦しむ。放浪の果てに、彼女はムーア・ハウスにたどり着くが、召使のハナ (Hannah) に追い返されてしまう。ジェインが自分の死を覚悟したところで、セント＝ジョンが彼女に声をかけるのである。以下に引用する部分は、ジェインが初めてセント＝ジョンに出会う場面である。

‘I can but die,’ I said, ‘and I believe in God. Let me try to wait His will in silence.’

These words I not only thought, but uttered; and thrusting back all my misery into my heart, I made an effort to compel it to remain there – dumb and still.

‘All men must die,’ said a voice quite close at hand; ‘but all are not condemned to meet a lingering and premature doom, such as yours would be if you perished here of want.’ (386; ch. XXVIII)

(「もう死ぬほかはない」と私は言った。「神さまを信じよう。静かに神の御心みこころを待とう」この言葉を私は頭のなかで考えただけでなく、口に出して言っていた。そしてもろもろの苦難をすべて胸のうちに押しもどし、そこで黙らせ静かにさせようと努めた。「人間はだれしも死ぬものです」すぐそばで人声がした。「しかし、あなたがここでひ

もじさのあまり死ぬとしても、ひとがみな、あなたのように、早過ぎた死をじりじりと迎えるとはかぎらないのですよ」)

このように、ジェインがセント＝ジョンと出会うのは、彼女が死を覚悟する瞬間のことである。この後、セント＝ジョンは彼女を自分の屋敷の中へ入れて、彼の妹たちとともにジェインに食べ物と宿を提供する。セント＝ジョンと彼の妹たちはジェインに、自分の知り合いや自分自身のことについて話すように求めるが、ジェインは話そうとしない。この日から3日後に、彼女は自分の経歴を話すものの、自分の知り合いについての情報は隠し続けるのである。

なぜジェインが死を覚悟したのか、を引用した部分とその後続く部分だけで読者が理解することは困難である。なぜならば、彼女が死を覚悟するまでの経緯が書かれていないからである。ジェインがセント＝ジョンと出会う場面の後に続く部分は、彼女が飢えて衰弱していることを読者に示すだけである。彼女が死を覚悟した理由は飢えて衰弱したからであろうと読者が推測することは可能である。一方で、飢えが彼女に死を覚悟させるほどに深刻なものであったのかどうかは、読者には分からない。彼女を飢えに追い込んだ詳しい事情を知らなければ、ジェインの言葉は大きさに見えるものである。ここで引用したジェインの言葉の直前の部分においては、召使のハナがジェインの言動を演技だと思い、ジェインが押し込み強盗の仲間ではないかと疑って追い返している。ジェインはこの時、死を覚悟するほどに飢えて衰弱しているようには見えない外見をしていたと思われる。

ジェインは、セント＝ジョンと出会う前に二日間放浪している。彼女は、1ペニーも持っていなかったために、食べ物を買うことはできなかった。それゆえに、彼女は村を歩きまわって、食べ物を恵んでくれるように村の人々に頼んでいた。放浪の間に彼女が口にしたものは、パンとポリッジ（穀物を水または牛乳で煮た粥）だけである。彼女がセント＝ジョンと出会ったのは、放浪し始めて3回目の晩のことである。「作者」ジェインがこれらのことを補足的に書けば、彼女が死を覚悟した理由を読者は知ることができる。

しかし当然、読者がその補足的な情報を読めば、なぜジェインが放浪しなければならなかったのかという疑問が読者に浮かんでくるであろう。ジェインは3日後、自分が放浪した理由についてセント＝ジョンや妹たちに対して次のように説明している。

‘I left Lowood nearly a year since to become a private governess. I obtained a good situation, and was happy. This place I was obliged to leave four days before I came here. The reason of my departure I cannot and ought not to explain: it would be useless, dangerous, and would sound incredible. No blame attached to me: I am as free from culpability as anyone of you three. Miserable I am, and must be for a time; for the catastrophe which drove me from a house I had found a paradise was of a strange and direful nature. . . .’ (399; ch. XXIX)

(「ほぼ一年前、家庭教師になるためにローウッドを去りました。よい勤め口を得まし

て、幸せでした。そのお屋敷を、ここにまいる四日前に余儀なく立ち去りました。立ち去った理由は説明できませんし、すべきでもありません。無益なことです——危険でもありますし、とうてい信じてはいただけないでしょう。わたくしの過ちではありません。ここにおいでのお三方と同じく、わたくしにはまったく罪とががございません。でも惨めです、しばらくは惨めな思いをしなければなりません。わたくしが天国だと思っていたあの屋敷からわたくしを追い立てた破局とは、世にも奇怪な悲喜きままるものでした。…」

ジェインはこの時、家庭教師をやめて屋敷を立ち去った理由を説明できない。それを説明できたとしても、それは聞き手には信じがたいことであると彼女は判断したのである。彼女に結婚を申し込んできた金持ちの男性にはすでに妻がいるという事実があった。この事実が結婚式最中に発覚して、合法的に結婚できなくなったというのがジェインを屋敷から立ち去らせた理由である。

この理由が聞き手にとって信じがたいものであることは、確かに容易に想像できることである。なぜならば、重婚はキリスト教の教義によって禁じられていることであり、法律によっても制限されていることでもあるからである。『ジェイン・エア』の年代は定かではないが、もしもエドワードとジェインとの結婚が、1835年の婚姻法の立法以後に起きているとすれば、エドワードは重婚罪を意図するという重罪を犯しているということになる。

(Sutherland 72) したがって、「作者」ジェインが読者に向けて補足的にその理由を説明する文章を書いたとしても、キリスト教の教義や法律に反する重婚を計画することは読者にとって想像しがたいことであるため、読者がその理由を信じることは予想できる。

さらに、ジェインが屋敷を立ち去った理由の一つだけではなく、他の理由もある。その男性すなわちエドワード・ロチェスターは、重婚となることを知りつつも、ジェインに結婚を申し込んだ。彼は、重婚を成し遂げるために彼の妻を屋敷に監禁しており、そのことをジェインに隠し続けていた。彼の妻は精神に支障をきたしており、他人に襲いかかる人物である。第20章においては、彼の妻がリチャード・メイソン (Richard Mason) にかみついて出血させ、外科医による治療を要した。これらのこともジェインが屋敷を立ち去った理由である。

また、エドワード・ロチェスターがキリスト教の教義や法律に反してでも重婚を望んだ理由を説明するためには、彼が抱えていた事情を書かなければならない。彼は、彼の父によってメイソン家の財産を得るためにバーサ・メイソンと結婚させられた。しかし、エドワード・ロチェスターは結婚の際、バーサが狂人の家系の出身であることを知らされていなかった。彼がそれを知ったのは結婚してからのことだった。彼は狂人ではない妻を得たかったのである。

このように、ジェインがセント＝ジョンと出会った経緯を書こうとすると、放浪の理由

も「作者」ジェインは書かなくてはならなくなる。放浪の理由を説明するには、ジェインが家庭教師をしていた屋敷すなわちソーンフィールド・ホールにおける出来事も語らざるを得ない。ゆえに「作者」ジェインは、自分がソーンフィールド・ホールにおいて経験したことを詳しく書いていられると考えられるのである。

二項 ジェインのための仕事探し

セント＝ジョンはリヴァーズ (Rivers) 家の人間である。リヴァーズ家は貧しい。セント＝ジョンの亡くなった父親が数年前に膨大な負債を抱えてしまい、財産を残すことができなかったからである。リヴァーズ家の人々は地主階級すなわち上流階級に属していたが、働かざるを得ない身分になってしまった。セント＝ジョンには父親の残した負債がある。そのため、セント＝ジョンの妹であるダイアナ (Diana) とメアリ (Mary) は家庭教師をしている。女性の家庭教師は召使と同等の扱いを受ける職業であり、ダイアナとメアリは、それぞれが雇われた別々の屋敷で質素な暮らしをしている。このような事情からセント＝ジョンは、自分自身は貧しい身であるという意識を持っていた。

一方でジェインは、ダイアナやメアリと同じ女性の家庭教師であったが、ソーンフィールド・ホールにおいては裕福な暮らしをしていた。エドワード・ロチェスターがジェインを自分の妻として迎えようと考えており、自分と同等の暮らしをさせようとしていたからである。ジェインは一時的に上流階級の女性と同じような暮らしをしていたのである。彼女は、放浪している時には、農夫に物乞いではなく風変わりな婦人であると思われるような服を着ていた。ジェインの上等な服はセント＝ジョンに、彼自身の貧しさと彼女の屋敷における暮らしぶりととの差を強く意識させるものであり、彼はしばしば彼女に、自分は貧しい身であると言う。セント＝ジョンは、ジェインに学校の教師という仕事を紹介する時、次の言葉を口にする。

‘And since I am myself poor and obscure, I can offer you but a service of poverty and obscurity. *You* may even think it degrading – for I see now your habits have been what the world calls refined: your tastes lean to the ideal, and your society has at least been amongst the educated; but I consider that no service degrades which can better our race. . . .’ (407; ch. XXX)
(「わたし自身が貧しくてとるにたりない人間なので、あなたにも貧しくてとるにたりない仕事しかあてることができません。きっとあなたは品位をおとしめられたと考えるかもしれない。あなたの日常の暮らしは、どうやらいわゆる上品な生活だったようだから。あなたの趣味は理想に傾いているし、あなたがつきあってきた私たちは、少なくとも、教養あるひとびとに限られていたようだ。しかしわれわれ人類を向上させるという奉仕であれば、品位をおとしめるとは、わたしは思わない。…」)

前述のとおり、女性の家庭教師は召使と同等の扱いを受ける職業であり、上流階級の女性のように上品な生活をすることはできない。セント＝ジョンの妹たちは家庭教師であり、ジェインも家庭教師であった。したがって、ジェインもセント＝ジョンの妹たちと同じような暮らしをしていたと考えるのが自然である。しかしながらジェインは、エドワード・ロチェスターが彼女を家人として扱おうとしていたため、セント＝ジョンの妹たちよりも裕福な暮らしをしていた。ジェインがソーンフィールド・ホールにおいてどのように暮らしていたのかを詳しく書かなければ、ここで引用したセント＝ジョンの言葉と彼の心情は読者にとって理解しがたいものになる。この点においても「作者」ジェインは、自分がソーンフィールド・ホールに住んでいた時のことを書かざるを得ないのである。

また、セント＝ジョンはジェインに仕事を紹介しようとしなかった。彼は3週間前に学校の教師という仕事を見つけていたが、そのことを言わないでいた。セント＝ジョンは、ジェインに新しい仕事について尋ねられ、次のように返答する。

‘I found or devised something for you three weeks ago; but as you seemed both useful and happy here – as my sisters had evidently become attached to you, and your society gave them unusual pleasure – I deemed it inexpedient to break in on your mutual comfort till their approaching departure from Marsh End should render yours necessary.’ (406; ch. XXX)

(「三週間前にあなたにふさわしい仕事を見つけたというか、考えついたのですが、あなたはここでも役に立っているし、それに幸せそうだし——妹たちはどうもあなたがすっかり気に入ってしまったようで、あなたのおつきあいが、またとない楽しみになったようなので——妹たちがマーシュ・エンドを出る日が近づいて、あなたにその仕事が必要になるまでは、みんなの楽しみを邪魔はすまいと思ったものですからね」)

このようにセント＝ジョンは、3週間もジェインに仕事を紹介しないでいた理由を述べるが、他の理由が存在している。彼はこの言葉の後、彼が見つけた仕事は何であるかを具体的に言おうとせず、それが条件の悪い仕事であることを繰り返して示唆する。彼は、自分自身が貧しいために、貧しい仕事しか紹介できないと言う。ジェインは粘り強く彼に説明を促し続け、最終的にセント＝ジョンは、その仕事が村の学校の教師であると明かす。ジェインが彼に仕事探しについて尋ねてから、彼女が仕事を引き受けると返事をするまでに、セント＝ジョンは“poor”（「貧しい」）という言葉を経るのを4回、口にするのである。つまりセント＝ジョンは、自分自身の貧しさのために、以前よりも条件の悪い仕事をジェインに紹介せざるを得ないことに悩み、彼女に新しい仕事について言えずにいたのである。この理由も、ソーンフィールド・ホールにおけるジェインの生活について「作者」ジェインが書かなければ、読者にとって想像しがたいものである。

このように、セント＝ジョンがジェインに仕事を紹介する場面を書くためにも、「作者」ジェインはソーンフィールド・ホールにおけるジェインの暮らしぶりを描写する必要がある。

るのである。

三項 ジェインの愛する男性

ジョン・エアが亡くなり、彼の弁護士であるブリッグズ (Briggs) は、ジョン・エアが定めた相続人のジェイン・エアをさがすが、彼女を見つけることができなかった。そこでブリッグズは、彼女の従兄であるセント＝ジョンに彼女の行方について手紙で問い合わせる。彼女はジェイン・エリオットという偽名を使いながらセント＝ジョンの屋敷に隠れて暮らしていたため、ブリッグズは彼女を見つけれなかったのである。

セント＝ジョンは、ジェイン・エアがジェイン・エリオットの本名なのではないかと疑う。ブリッグズの手紙に書かれていたジェイン・エアの経歴と、ジェイン・エリオットの経歴とが似ていたからである。そしてセント＝ジョンは、ジェイン・エリオットと名乗った女性が「ジェイン・エア」と書いた紙を見付け、彼女こそが相続人のジェイン・エアであることを確信する。彼は彼女に、ジェイン・エアの経歴を話して、彼女の本名が「ジェイン・エア」であることを認めさせる。

セント＝ジョンの話の中で、エドワード・ロチェスターの名前が出る。ジェインは、弁護士のブリッグズはエドワードにも手紙で問い合わせただろうと考え、エドワードが書いた返事についてセント＝ジョンに尋ねる。

‘Mr Briggs intimates that the answer to his application was not from Mr Rochester, but from a lady: it is signed “Alice Fairfax.”’

I felt cold and dismayed: my worst fears then were probably true: he had in all probability left England and rushed in reckless desperation to some former haunt on the Continent. . . . Oh, my poor master – once almost my husband – whom I had often called ‘my dear Edward!’

‘He must have been a bad man,’ observed Mr Rivers.

‘You don’t know him – don’t pronounce an opinion upon him,’ I said with warmth. (439-440; ch. XXXIII)

(「ブリッグズ氏によると、彼の問い合わせに対する返事は、ロチェスター氏からではなく、さる婦人から来たものようです。『アリス・フェアファックス』という署名がしてあります」

私は愕然とし、全身が総毛立った。すると私のもっとも恐れていたことが、現実になったのだろうか。彼は自暴自棄のあまり英国を去り、昔よく訪れたことのある大陸のどこかへやみくもに飛び出していったに違いない。…ああ、お気の毒な私の主——かつて私の夫になろうとしていたひと——『愛しいエドワード』^{あるじ}、いつも呼んでいた方！

「悪い男だったにちがいませんね」とセント＝ジョンが言った。

「あの方をご存じないのに——あの方の批判はなさらないで」。私はむきになって言った。）

エドワード・ロチェスターはキリスト教の教義に反する重婚を計画してジェインをだました男であり、牧師であるセント＝ジョンの言うように、エドワードは「悪い男」であったと考えるのが自然である。他方で彼女は、エドワードについて心配し、セント＝ジョンがエドワードのことを悪く言うのを嫌がっている。セント＝ジョンの言葉に対するジェインのこの反応は、彼女の事情を知らない読者にとっては極めて不自然なものである。

しかし、読者があらかじめ、エドワードのもとを立ち去った時のジェインの心情を知っていたならば、ジェインの反応は納得のいくものになる。ジェインにはエドワードを愛するがゆえに彼のもとにとどまりたいと思う感情があったが、一方で重婚は道徳や法律に反する。ジェインは両者のどちらを選ぶかで激しく葛藤した末に、道徳や法律を選んだのである。この選択には、道徳や法律に反することは自分の身を守るために不利なことであるというジェインの考え方が働いていた、と指摘されている。(風間 39)

ジェインがソーンフィールド・ホールから立ち去ったのは、自分の身を守るためであり、彼への愛情を失ったからではない。彼女は、ムーア・ハウスに来てからもエドワード・ロチェスターを愛し続けているのである。また、エドワードはジェインを抑圧することはしなかった。エドワードは彼女の自由と個性のどちらも脅かしておらず、ジェインに分別と愛との間で葛藤させるということはしていない。(Benvenuto 634) エドワードは、ジェインにとって「悪い男」ではなかった。

それゆえにジェインは、エドワードのことを心配しており、セント＝ジョンがエドワードのことを悪く言うことを嫌がるのである。このように、この場面におけるジェインの反応を読者に納得させるためには、この場面よりも先に、彼女がソーンフィールド・ホールにおいて葛藤していたということを示す場面を書いておく必要があるのである。

二節 ファーランドー・マナー

一項 セント＝ジョンとの別れ

ジェインはセント＝ジョンの求婚に応じることを考えるが、最終的には彼のもとを離れ、エドワード・ロチェスターと結婚する。彼女はセント＝ジョンではなく、エドワードを選ぶのである。彼女がこの選択をした経緯と理由を説明するには、以下に述べるようにソーンフィールド・ホールやファーランドー・マナーについても書く必要がある。

セント＝ジョンの結婚の提案を受け入れるには、ジェインは自分の自然な性質の半分を否認しなければならず、彼の妹であるダイアナの見解でさえも、そのような結婚は不自然なものであった。(Burkhart 178) 彼の結婚の提案がジェインを悩ませていた。セント＝ジ

ジョンがジェインに結婚の承諾を求めた時、彼女は神の御心にかなう正しいことをしたいと思ひ、自分に道を示してくれるように神に乞う。彼女は自分の名前を呼ぶ声を聞き、その声を発した人物がエドワードであることを理解する。

‘What have you heard? What do you see?’ asked St John. I saw nothing, but I heard a voice somewhere cry –

‘Jane! Jane! Jane!’ – nothing more.

‘O God! What is it?’ I gasped.

I might have said, ‘Where is it?’ . . . And it was the voice of a human being – a known, loved, well-remembered voice – that of Edward Fairfax Rochester; and it spoke in pain and woe, wildly, eerily, urgently.

‘I am coming!’ I cried. ‘Wait for me! Oh, I will come!’ . . .

‘Where are you?’ I exclaimed. (483; ch. XXXV)

(「なにか聞こえたのか？ なにが見えるのか？」とセント＝ジョンが訊いた。なにも見えなかった。だがどこかで叫ぶ声を聞いた――

「ジェイン！ ジェイン！ ジェイン！」。それだけだった。

「ああ、神さま！ あれはなんでしょう？」。私は喘ぐように言った。

「あれはどこでしょう？」と訊いたのかも知れない。…人間の声だった――聞き覚えのある、なつかしい、決して忘れられぬ声――エドワード・フェアファックス・ロチェスターの声。その声は苦悶に満ち、荒々しく不気味な切迫した口調だった。

「まいります！」と私はさげんだ。「待っていてください！ ああ、まいりますとも！」

…

「どこにいらっしゃるのです？」と私は叫んだ。)

セント＝ジョンのジェインに対する支配は強く、彼女は精神の点において押さえつけられていた。彼女は、精神の自由を再び得た時しか、自由にエドワードのもとへ戻れなかった。(Yeazell 139) エドワードの声がジェインを勢いづかせ、ジェインはセント＝ジョンの抑圧から脱して精神の自由を取り戻す。翌日、ジェインは、エドワードをさがすためにムーア・ハウスを出て、ソーンフィールド・ホールに向かう。この時点においては、ジェインはまだセント＝ジョンの宣教の旅に同行することを考えていた。セント＝ジョンが旅立ちの前に彼の知人たちに別れを告げておくためにケンブリッジへ向かって家を出たのを見ながら、ジェインはイングランドから永遠に離れる前に会わなくてはならない人がいる、と考えている。

ソーンフィールド・ホールは火事によって廃墟と化していた。バーサが火事で亡くなったこと、そしてエドワードがフォーンディーン・マナーに引っ越したことをジェインは宿屋の主から聞く。ジェインとエドワードとの結婚の障害であったバーサはすでに亡くなっ

ていることから、結婚を合法的に行なうことができるようになった。ジェインはファーンディーン・マナーを訪ね、エドワードと再会する。エドワードは、ジェインの名を叫んだ際にジェインの言葉が聞こえたと彼女に語る。

‘As I exclaimed “Jane! Jane! Jane!” A voice – I cannot tell whence the voice came, but I know whose voice it was – replied, “I am coming: wait for me;” and a moment after, went whispering on the wind the words, “Where are you?” (515; ch. XXXVII)

(わたしが “ジェイン！ ジェイン！ ジェイン！” と叫ぶと、声が聞こえた。どこから聞こえたのかわからないが、だれの声かわかった。 “まいります、待っていてください” という声が聞こえた。そのすぐあとに、風によってこんなささやきが流れてきた—— “どこにいらっしゃるのです？”)

エドワードが聞いた言葉は、ジェインが発した言葉と同じである。この出来事が起こったのは、月曜日の夜のことであった、とエドワードは述べる。月曜日の夜は、ジェインがエドワードの声を聞いた日時である。この言葉と日時の一致は、ジェインにエドワードとの結びつきを強く感じさせたと思われる。エドワードがこの出来事について語る場面の後、「作者」ジェインは、自分がエドワードと結婚したと読者に伝えている。エドワードとの結婚の結果、ジェインはセント＝ジョンと別れることが確定したのである。

このように、ジェインがセント＝ジョンと別れたことを書くためには、ソーンフィールド・ホールとファーンディーン・マナーに言及しなければならない。したがって「作者」ジェインは、ソーンフィールド・ホールだけでなくファーンディーン・マナーにおける出来事も書いているのである。

二項 エドワードとの会話

ジェインはファーンディーン・マナーにおいてエドワード・ロチェスターと再会する。ソーンフィールドを立ち去ってから何をしていたのかと彼は彼女に尋ね、彼女は放浪した3日間について話す。「作者」ジェインは、放浪について彼と話したことは手短かに書いている一方で、セント＝ジョンについてエドワードと話したことは詳細に書いている。セント＝ジョンについての二人の会話が書かれている文章は、次に引用する部分から始まっている。

‘Well, whatever my sufferings had been, they were very short;’ I answered: and then I proceeded to tell him how I had been received at Moor House; how I had obtained the office of school-mistress, etc. The accession of fortune, the discovery of my relations, followed in due order. Of course, St John Rivers’ name came in frequently in the progress of my tale. When I

had done, that name was immediately taken up.

‘This St John, then, is your cousin?’

‘Yes.’

‘You have spoken of him often: do you like him?’

‘He was a very good man, sir; I could not help liking him.’ (507-508; ch. XXXVII)

（「わたくしの受けた苦しみがどんなものであったにせよ、短いあいだでした」と私は答え、どのようにムーア・ハウスに迎えられ、小学校の教師の職をあたえられたか、その経緯を話した。遺産を相続したこと、身内のものを発見したことなども順を追って話した。その話のなかにはむろん、セント＝ジョン・リヴァーズの名前もひんぱんに出てきた。話し終えると、その名前がさっそく取り上げられた。

「そのセント＝ジョンというのは、君の従兄なのか？」

「はい」

「彼の名前がよく出てくるが、好きだったのか？」

「とてもいい方でした。好きにならずにいられませんでした」

エドワードは、セント＝ジョンがジェインの夫であると思ひ込み、ジェインにセント＝ジョンのもとへと戻るように繰り返す。ジェインが彼の誤解を解くまで、セント＝ジョンは二人の会話の話題であり続けるのである。

エドワードは、自分の愛する女性が結婚した相手と思われる男性について詳しく知るために、セント＝ジョンについてジェインに複数の質問をし、ジェインはエドワードの質問に答えていく。この場面においては、エドワードは読者の分身であると考えられる。なぜならば、彼は読者と同じように、彼女の物語からセント＝ジョンを知ることになるからである。彼が読者の代わりに、すでに語られたセント＝ジョンの人物像やジェインとのかかわりについて、「作者」のジェインに尋ねているのである。

エドワードの質問とジェインの応答は、ムーア・ハウスにおけるセント＝ジョンについて簡潔にまとめたものになっており、読者の理解に役立つ。「作者」ジェインは、この会話を書くために、ファーンディーン・マナーを物語の最後の舞台として書いたと思われる。

第四章 ジェインの幼少期

本論の第二章において、「作者」ジェインの目的は、セント＝ジョンについて自分が知っているすべてのことを書くということであるとした。ソーンフィールド・ホール部分とファーンディーン・マナー部分は、彼女の目的を達成するために必要であることを、本論の第三章において確認することができた。本論の第四章においては、第三章と同様に、ローウッド養育院を舞台とする第5章から第10章までの部分と、ゲイツヘッド・ホールを

舞台とする第1章から第4章までの部分について確かめていく。

一節 ローウッド養育院

一項 ブロックルハースト

第5章から第10章までの物語の舞台は、ローウッド養育院である。ジェインがそこに入った時、ブロックルハーストがその養育院の管理者と財務担当者を務めており、生徒の食事や衣服を購入している。生徒に出される毎日の食事は非常に少なく、生徒は常に空腹である。また、彼が生徒に与える衣服は、冬の寒さに耐えられるものではない。

ブロックルハーストは、院長のミス・テンブル (Miss Temple) に養育院を規則に従って質素に運営することを厳格に求め、規則に基づかない出費はどのような事情があろうとも認めない。例えば、焦げているがゆえに食べられない朝食が生徒に提供された後、ミス・テンブルは、生徒が昼食の時間まで飢えることのないようにパンとチーズの軽食を提供させた。しかし、その措置は規則に定められていなかった。ブロックルハーストはその措置を贅沢なことであるとして禁じるのである。

このようにブロックルハーストが飢えと寒さで生徒たちの体力を奪っていたため、生徒たちは疫病にかかりやすくなっていた。そして4月に、チフスが養育院において蔓延してしまう。

Semi-starvation and neglected colds had predisposed most of the pupils to receive infection: forty-five out of the eighty girls lay ill at one time. Class were broken up, rules relaxed. . . . Many, already smitten, went home only to die: some died at the school, and were buried quietly and quickly, the nature of the malady forbidding delay. (91-92; ch. IX)

(半ば飢えている状態となおざりにされていた風邪のせいで、生徒たちの大半がこれに感染しやすい状態しやす状態だった。八十人の生徒のうち四十五人がいっせいにやまい病に伏した。学級は閉鎖され、規則もゆるくなった。…すでに病魔に襲われた生徒たちの多くは、死ぬために家に帰るのだった。学校で息を引き取った者たちは、手早くひそかに埋葬された。この疫病の性質上、一刻の猶予も許されなかった。)

チフスの流行が終焉を迎えた後、犠牲者が多かったことから、ローウッド養育院は大衆の注目を集める。疫病流行の原因が調査され、ブロックルハーストの運営方針が原因であったことが明らかにされる。その結果、ブロックルハーストは、財務担当者の地位は維持できたものの、養育院の管理者の立場を失うこととなった。セント＝ジョンがローウッド養育院におけるこの出来事を知っているということが、次に引用する部分において示されている。ジェインは、自分の生い立ちについてセント＝ジョンに語る。

‘I am an orphan, the daughter of a clergyman. My parents died before I could know them. I was brought up a dependent; educated in a charitable institution. I will even tell you the name of the establishment, where I passed six years as a pupil, and two as a teacher – Lowood Orphan Asylum, —shire: you will have heard of it, Mr Rivers? – the Rev. Robert Brocklehurst is the treasurer.’

‘I have heard of Mr Brocklehurst, and I have seen the school.’ (398-399; ch. XXIX)

(わたくしは孤児です。牧師の娘でした。両親はわたくしが物心つかぬうちに他界しました。そのため他人に扶養され、慈善施設で教育を受けました。生徒として六年間、教師として二年間過ごしたその施設の名前をお教えしましょう。××州のローウッド養育院です。お聞きになったことがおありでしょうね、リヴァーズさん？——ロバート・ブロックルハースト牧師が財務担当者でした」

「ブロックルハースト氏のことは聞いたことがあるし、その学校は見たことがありますよ」)

「作者」ジェインが自叙伝を書いた目的は、セント＝ジョンについて自分の知っているすべてのことを書くということである。当然、彼女は、セント＝ジョンがブロックルハーストについて知っていることも書くことになるであろう。

セント＝ジョンがブロックルハーストの何を知っているのかは、上で引用した二人の会話には示されていない。そのため、彼女はそれを明らかにする文章を追加する必要がある。しかし、養育院でチフスが流行したことを説明する文章は、この場面には合わない。この会話の目的は、ジェインが自分の経歴をセント＝ジョンに伝えることだからである。養育院におけるブロックルハーストの不祥事について説明する文章は、別の部分に書く方が自然であろう。したがって、「作者」ジェインは、ローウッド養育院を舞台とした部分を追加して書いたと考えられる。

二項 ヘレン・バーンズ

第9章において「作者」ジェインは、ローウッド養育院の生徒が病気で亡くなったことに関して説明しており、ヘレン・バーンズ (Helen Burns) の死を詳細に描写している。ヘレン・バーンズは養育院の劣悪な環境の中で肺病 (consumption) をわずらって、養育院に設けられた病室で亡くなった。彼女はローウッド養育院におけるジェインの親友であった。

ヘレン・バーンズは、「作者」ジェインの自叙伝においてセント＝ジョンとの関係が見られない人物の一人である。彼女は彼の知り合いではなく、彼の親族でもない。また彼女は、エドワードの重婚の計画やジョン・エアの遺産のような、セント＝ジョンとかかわりのある事柄にも関係していない。

セント＝ジョンに関することすべてを説明することが「作者」ジェインの自叙伝の目的であるならば、セント＝ジョンと関係のない人物について詳細に書く必要はない。しかしながら「作者」ジェインは、ヘレン・バーンズというセント＝ジョンと関係のない人物について詳細に書いている。第5章から第9章までの大部分が、ヘレン・バーンズに関する記述で構成されているのである。

このヘレン・バーンズに関する詳細な記述は、ヘレン・バーンズが敬虔なキリスト教徒であることを明示している。敬虔な人物であるという点においては、ヘレン・バーンズはセント＝ジョンと同じである。Paul Pickrel は、ヘレン・バーンズとセント＝ジョンは水に関する家名を持っており、洗礼の水によって人がキリスト教を信仰する者になる、と述べている。(180) ヘレンの家名「バーンズ」(Burns) は、セント＝ジョンの家名「リヴァーズ」(Rivers) と同じように「水」との関連を想像させるものである。ヘレン・バーンズは、「水」の気質を持っているという点においてもセント＝ジョンと同じであると言える。

ヘレン・バーンズの人柄は、セント＝ジョンのものとは対照的である。ヘレン・バーンズの言動は、他者に努力を求めめることはせずに自分を犠牲にするものであり、彼女は養育院における不合理な扱いに耐えている。他方でセント＝ジョンの言動は、他者に努力を求めて他者を犠牲にするものである。例えば彼は、ジェインを自分の宣教の旅に同行させることを意図して、ジェインに対してヒンドスタニー語を完全に身につけるように求めている。ジェインはヒンドスタニー語の勉強を通して彼から努力することを求められ、自由の点で自分を犠牲にすることになった。

ブロックルハーストも、セント＝ジョンと同じように、他者に努力を求めて他者を犠牲にする言動をしている人物である。ブロックルハーストは、養育院の生徒たちに厳格な規則に従うよう努力を求め、その結果として疫病の蔓延という形で生徒を犠牲にしている。

J. Jeffrey Franklin は、自叙伝における記述がセント＝ジョンをキリスト教徒の信仰の模範としようと試みているにもかかわらず、セント＝ジョンは、ヘレン・バーンズをキリスト教徒の模範としている根本的な要素を欠いており、ブロックルハーストの持っている負の性質を備えているということがわかる、と指摘している。(466) セント＝ジョンは、他者に努力を求めめることはせずに自分を犠牲にするという精神を欠いており、他者に努力を求めて他者を犠牲にする負の性質を持っている。人柄の点においてセント＝ジョンとは対照的な人物であるヘレン・バーンズが存在は、セント＝ジョンに欠けている精神と彼の負の性質とを際立たせている。

セント＝ジョンについて知っているすべてのことを書くということには、彼の人柄に関して書くということが含まれる。「作者」ジェインは、セント＝ジョンとは対照的な人物としてヘレン・バーンズを登場させ、セント＝ジョンに欠けている精神と彼の負の性質とを読者にわかるようにした、と思われる。

二節 ゲイツヘッド・ホール

ジェインは、彼女の叔父であるジョン・エアが亡くなり、彼の遺産が彼女に贈られる、とセント＝ジョンから知らされ、その知らせが持つ意味について考える。

Besides, the words Legacy, Bequest, go side by side with the words Death, Funeral. My uncle I had heard was dead – my only relative; ever since being made aware of his existence, I had cherished the hope of one day seeing him: now, I never should. And then this money came only to me: not to me and a rejoicing family, but to my isolated self. (441; ch. XXXIII)

(それに遺産や遺贈という言葉には、死や葬式という言葉がまわりついている。私の叔父——ただ一人の身内——が亡くなったという。叔父の存在を知らされてから、いつかは会えるという希望は持っていた。もう会うことはないのである。そしてその叔父の財産が私だけに贈られた。私と、そして喜びを分かち合う身内に贈られたのではなく、私だけに贈られたのだ。)

ゲイツヘッド・ホールのミス・リードについての説明がなければ、この引用した文章から、いつジェインが叔父の存在を知ったのか、という疑問が浮かぶ。なぜならば、ジェインが、セント＝ジョンから聞くよりも前に、叔父の存在を知っていたことがこの文章から読み取れるからである。さらに、彼女は遺産の総額を推測していたということが、次に引用するジェインとセント＝ジョンとのやりとりにおいて示されている。

‘How much am I worth?’

‘Oh, a trifle! Nothing of course to speak of – twenty thousand pounds, I think they say; but what is that?’

‘Twenty thousand pounds?’

Here was a new stunner – I had been calculating on four or five thousand. This news actually took my breath for a moment: Mr St John, whom I had never heard laugh before, laughed now. (441; ch. XXXIII)

(「遺産の額はどれほどですか?」)

「ああ、わずかなものです。言うほどのものではありません——たしか二万ポンドだそうですよ——いかほどのこともないでしょう?」

「二万ポンド!」

またもや愕然とした——せいぜい四、五千ポンドぐらいのつもりでいたのだ。この新しい事実を知って、一瞬私は息を呑んだ。これまで笑ったことのないセント＝ジョンが笑った。)

ジェインが叔父の財産の総額を推測するには、彼がどのように金を稼いでいるのかを彼女があらかじめ知っている必要がある。彼女は叔父の収入についてどのようにして知ったのか、というもう一つの疑問も浮かぶ。

二つの疑問に答えるためには、ゲイツヘッド・ホールのミセス・リードが物語に登場する必要がある。なぜならば、ミセス・リードこそが、ジェインに叔父の存在と彼の遺産を相続できることを教えた人物だからである。ミセス・リードは自分の死が近づいていることを悟り、ジェインをゲイツヘッド・ホールに呼び寄せる。この時、ジェインは、ソーンフィールド・ホールにおいて家庭教師をしていたため、屋敷の主人であるエドワードに休暇をもらっている。ミセス・リードはジェインに、ジェインの叔父であるジョン・エアから自分が受け取った手紙を渡し、それを読むように言う。次に引用する文章は、その手紙に書かれていたものである。

‘MADAM, – Will you have the goodness to send me the address of my niece, Jane Eyre, and to tell me how she is? It is my intention to write shortly and desire her to come to me at Madeira. Providence has blessed my endeavours to secure a competency; and as I am unmarried and childless, I wish to adopt her during my life, and bequeath her at my death whatever I may have to leave. – I am, Madam, etc., etc.

‘JOHN EYRE, Madeira.’

(274-275; ch. XXI)

(拝啓

小生の姪めいにあたるジェイン・エアの居場所並びにその消息をご一報頂ければ幸甚こうじんに存じます。近く書状を送り、マデイラの小生のもとに呼びよせたい旨伝える所存です。神のご加護により小生の努力も報われ相応の資産も蓄えております。妻なく子もおりませぬ身故、存命中に姪を養女といたし、死後残さねばならぬものはすべて姪に遺贈したき所存であります。

敬具

マデイラにて ジョン・エア)

ジェインはこの手紙を読むことで、叔父の存在と彼の遺産を自分が相続できることを知るのである。

しかし、その手紙の日付は3年前のものであった。実は、ミセス・リードは3年間もその手紙をジェインに渡さずに持ち続けていた。その理由は、ジェインに対する復讐をするためである。ジェインがゲイツヘッド・ホールからローウッド養育院に移ることが決まった時、ジェインはミセス・リードに対して初めて歯向かい、ミセス・リードはジェインに対して恐怖を覚えた。ミセス・リードはその出来事が忘れられず、ジェインに復讐をしよ

うと考えたのである。ミセス・リードは、手紙を渡す際にその復讐についてジェインに語る。

‘I tell you I could not forget it; and I took my revenge: for you to be adopted by your uncle, and placed in a state of ease and comfort, was what I could not endure. I wrote to him; I said I was sorry for his disappointment, but Jane Eyre was dead: she had died of typhus fever at Lowood. Now act as you please: write and contradict my assertion – expose my falsehood as soon as you like. . . .’ (275; ch. XXI)

(「どうしても忘れられない。だから復讐したの。おまえが叔父さんの養女になって、安楽に暮らすようになるなんて、たまらなかった。だから手紙を書いたの。お気を落とされるでしょうが、ジェイン・エアは亡くなりました。ローウッドでチフスのために死にましたって。さあ、これからはおまえの好きなようにおし。手紙を書いてわたしが言ったことを否定するがいい。すぐにでもわたしの嘘をあばくがいい。…」)

ミセス・リードはジェインが亡くなったとジョン・エアに伝えていたのである。それゆえに、ジェインは遺産を受け取れなくなっていた。そこで彼女は、自分の叔父であるジョン・エアに手紙を書いて、エドワードと結婚することを報告する。ジョン・エアはその手紙でジェインが生きていることを知り、ジェインは叔父の遺産を受け取れるようになるのである。

ジョン・エアは、パーサの兄であるリチャード・メイスンと知り合いであり、エドワードにはパーサという妻がいることに気付く。ジョン・エアは、病気でマデイラ (Madeira) から動けないために、自分の弁護士であるブリッグズにジェインとエドワードの結婚式へ出席させる。そしてブリッグズが、エドワードが重婚をしようとしていることを結婚式の最中に明らかにして、結婚式を取りやめさせる。

結婚式の後、ブリッグズはジェインにジョン・エアの職業を教える。ジェインはこの時に叔父がどのように金を稼いだのかを知り、叔父の財産の総額を推測できるようになるのである。

以上のように、ミセス・リードは、ジェインに叔父の存在と叔父の遺産を受け取れることを教えただけでなく、エドワードが重婚を計画していたことを明らかにするきっかけを生み出している。すでに述べたように、ジェインがセント＝ジョンと出会ったのは、重婚を計画していたエドワードから彼女が逃げたためである。したがってミセス・リードは、ジェインがセント＝ジョンと出会うきっかけを作った人物であるとも言えよう。

よって、ジェインが受け取る遺産やセント＝ジョンとの出会いについて説明するためには、ミセス・リードがジェインに手紙を渡したことと、ジェインがミセス・リードに歯向かったことを書く必要があると考えられる。それゆえに「作者」ジェインは、それらのことが起こった場面を書いているのであろう。

しかしながら、『ジェイン・エア』の最初の部分は、ジェインがミセス・リードに反抗して恐怖を覚えさせた場面ではない。ミセス・リードがジェインを暖炉のそばから遠ざけ、ジェインはカーテンの裏で本を読む。それから、ジョン・リードがその本を投げつけることによってジェインに怪我をさせ、ジェインがジョン・リードに抵抗する。その結果、ミセス・リードが召使たちに、彼女の夫が息を引き取った部屋にジェインを閉じ込めるように指示する。これが『ジェイン・エア』の第1章に書かれている出来事である。

この出来事は、ジェインがローウッド養育院に入ることになるきっかけを生み出している。ジェインはその部屋に閉じ込められたことによって病気になる、薬剤師のミスタ・ロイドに診てもらい、彼は、ジェインと会話をした際に、彼女には環境の変化が必要であると考えた。彼はジェインを学校へ送ることをミセス・リードに提案する。ミセス・リードはその提案を受け入れ、ジェインがローウッド養育院に入ることが決まるのである。

ミセス・リードはジェインをローウッド養育院に入れるために、その養育院の管理者であるブロックルハーストを家に招く。ミセス・リードはジェインの前で、ジェインには人をだます癖があると彼に伝える。このことがきっかけで、ジェインはミセス・リードに初めて歯向かい、ミセス・リードは恐怖を感じる。この出来事は第4章に書かれている。

このように、第1章から第4章までの出来事は繋がっている。第4章の出来事はジョン・エアの遺産に関係することであるから、第1章から第4章までの出来事はジョン・エアの遺産に関係のあることであると言える。セント＝ジョンはこの叔父の遺産の一部を受け取っている。「作者」ジェインが、セント＝ジョンについて自分が知っている全てのことを書くためには、この叔父の遺産について説明する必要がある。したがって彼女は、ゲイツヘッド・ホールを舞台とした第1章から第4章の部分も書かざるを得なかったと考えられる。

終章

本論の第一章四節においては、自叙伝の題名が『ジェイン・エア』であることには、ジェインが家族を探し求めて居所を転々とするという物語の内容を家名「エア」で示すという「作者」ジェインの意図があったとした。加えて、本論の第一章六節においては、『ジェイン・エア』が「作者」ジェインの自叙伝の題名になったことには、セント＝ジョンが関わっていることを導き出した。

次に本論の第二章において、ジェインとセント＝ジョンとのかかわりから、「作者」ジェインが自叙伝を書いたきっかけと目的を導き出した。きっかけは、彼女がセント＝ジョンから最後の手紙を受け取ったことである。その手紙によって彼女が、自分にとって特別な人がもうすぐ死んでしまう運命にあると知った。彼女が自叙伝を書いた目的は、彼について自分の知るすべてのことを書くということである。

本論の第四章において、ゲイツヘッド・ホールの部分とローウッド養育院の部分も、「作

者」ジェインの目的を達成するために必要であることを確認することができた。ソーンフィールド・ホールの部分とファーンディーン・マナーの部分も、本論の第三章において確認できている。そして、ムーア・ハウスとモートンを舞台とする部分は、彼女がセント＝ジョンと直接的にかかわっていた時期のことであるため、彼女の目的を達成するためには必要な部分であることは明らかである。したがって、第 1 章から第 38 章までの『ジェイン・エア』のすべての部分は、彼女の目的を達成するために書かれていると言える。これが、ジェインが過ごした 5 つの家が物語の舞台として選ばれている理由である。

以上のことから、「作者」ジェインは、セント＝ジョンについて自分の知っているすべてのことを書くために、『ジェイン・エア』を書いたと考えられる。それゆえに、彼女の自叙伝の最後には、セント＝ジョンを賛美する文章が書き連ねられているのであろう。

「作者」ジェインはセント＝ジョンとの結びつきを意識していたと思われる。自叙伝の題名を「ジェイン・ロチェスター」としたのは、エドワード・ロチェスターとの結婚や結びつきを読者に印象付けてしまい、セント＝ジョンと自分の結びつきが読者から忘れられやすくなる。そこで彼女は、『ジェイン・エア』という題名を付けることによって、セント＝ジョン・エア・リヴァーズと自分の結びつきが読者の記憶に残りやすいものとなるようにしたのである。

注

⁽¹⁾ Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (London: Penguin Books, 2006) 443; ch. XXXIII. 以下、本作品からの引用はこの版からとし、ページを () で表記する。日本語訳は、小尾英佐訳『ジェイン・エア (上)』(東京: 光文社, 2006)、小尾英佐訳『ジェイン・エア (下)』(東京: 光文社, 2006) による。

引用参考文献

Benvenuto, Richard. "The Child of Nature, the Child of Grace, and the Unresolved Conflict of *Jane Eyre*." *ELH*, vol. 39, No. 4, Dec. 1972, pp. 620-638. JSTOR, www.jstor.org/stable/2872703. Accessed 6 Jan. 2020.

Brontë, Charlotte. Ed. Stevie Davies. *Jane Eyre*. London: Penguin Books, 2006.

Burkhart, Charles. "Another Key Word for *Jane Eyre*." *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 16, no. 2, Sep. 1961, pp. 177-179. JSTOR, www.jstor.org/stable/2932482. Accessed 6 Jan. 2020.

Eells, Emily. "The French aire in *Jane Eyre*." *Cahiers victoriens et édouardiens [En ligne]*, 78 Automne | 2013, 1 Sept. 2013, journals.openedition.org/cve/839#article-839. Accessed 11 Aug.

2019. *Cahiers victoriens et éduardiens*, doi: 10.4000/cve.839.
- “Err, v.” *Oxford English Dictionary*, Oxford University Press, 2020,
www.oed.com/view/Entry/64094?rskey=PaXzEJ&result=2&isAdvanced=false#eid. Accessed
12 January 2020.
- “Eyre, n.” *Oxford English Dictionary*, Oxford University Press, 2020,
www.oed.com/view/Entry/67368?redirectedFrom=eyre#eid. Accessed 12 January 2020.
- Franklin, J. Jeffrey. “The Merging of Spiritualities: Jane Eyre as Missionary of Love.” *Nineteenth-Century Literature*. vol. 49, no. 4, Mar. 1995, pp. 456-482. JSTOR,
www.jstor.org/stable/2933729. Accessed 6 Jan. 2020.
- Pickrel, Paul. “Jane Eyre: The Apocalypse of the Body.” *ELH*. vol. 53, no. 1, Spring 1986, pp. 165-182. JSTOR, www.jstor.org/stable/2873152. Accessed 6 Jan. 2020.
- Sutherland, John. *Can Jane Eyre Be Happy? More Puzzles in Classic Fiction*. Oxford: Oxford University Press, 1997. サザーランド, ジョン『ジェイン・エアは幸せになれるか? 名作小説のさらなる謎』青山誠子・朝日千尺・山口弘恵訳 東京: みすず書房, 1999年.
- Yeazell, Ruth Bernard. “More True Than Real: Jane Eyre’s ‘Mysterious Summons’.” *Nineteenth-Century Fiction*. vol. 29, no. 2, Sep. 1974, pp. 127-143. JSTOR, www.jstor.org/stable/2933287. Accessed 6 Jan. 2020.
- 「Air!」『クラウン仏和辞典 机上版』, 大槻鉄男編, 三省堂, 1981年, pp. 31-32.
- 「Aire」『クラウン仏和辞典 机上版』, 大槻鉄男編, 三省堂, 1981年, p. 32.
- 青山誠子『シャーロット・ブロンテの旅——飛翔への渇き』東京: 研究社, 1984年.
- 奥村真紀『『ジェイン・エア』はどのような物語であるのか』, 『ブロンテ姉妹を学ぶ人のために』中岡洋・内田能嗣編 京都: 世界思想社, 2005年.
- 風間真起子『フェミニズムとヒロインの変遷——ブロンテ, ハーディ, ドラブルを中心に』京都: 世界思想社, 2011年.
- 白井義昭『シャーロット・ブロンテの世界——父権制からの脱却』東京: 彩流社, 1992年.
- 都留信夫「シャーロット・ブロンテとヨークシャー——『ジェイン・エア』と『シャーリー』をめぐって」, 『ブロンテ ブロンテ ブロンテ』日本ブロンテ協会編 東京: 開文社, 1989年.
- 中岡洋『『ジェイン・エア』を読む』東京: 開文社, 1995年.
- ブロンテ, シャーロット『ジェイン・エア (上)』小尾芙佐訳 東京: 光文社, 2006年.
- . 『ジェイン・エア (下)』小尾芙佐訳 東京: 光文社, 2006年.